

熱 い 嵐

松 浦 行 真

集英社

熱い嵐

著者紹介

一九二三年、大阪生まれ。
大正大学にまなび、一九四
六年サンケイ新聞入社、社
会部次長、文化部長（大阪）、
論説委員などをへて編集委
員。著書に「非命の宰相」
「風が燃えた」など。

昭和五十四年一月三十日 初版印刷

昭和五十四年二月十日 初版発行

著者 松浦行真

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ一〇 二一〇一

電話 (〇三) 二三〇一六一七一 (販売部)

印刷所 廣済堂印刷株式会社

検印廃止・乱丁落丁はお取替えます。

780-

目次

あいがき	283	あおい空	5
おきみ	39		
七ころび	68		
日本銀行	98		
政界へ	127		
パニック	152		
二月二十六日	191		

熱
い
嵐

装

幀

風間

完

編集協力 尚企画

あおい空

一

——だるま。

というのが、この物語の主人公に、終生ついてまわったあだ名である。
わかい読者のかたは、ご存じだろうか。

——高橋是清。

幼名和喜次、という。のち、軍閥とたたかい、二・二六事件で非命をとげたが、波乱の生涯を、
それこそ七ころび八起きし、一個の自然児のごとく、天衣無縫におくった財政家である。

その是清が、

——いかにだるまに似ていたか。

と、長年かれにつかえ、戦後にも大蔵大臣となり、つい先年、物故した津島寿一氏が、こんな話をのこしている。

大正八年四月というから、是清が原内閣の蔵相となって間もないころだ。ともに伊勢神宮へ参拝

にでかけ、宿で風呂あがりの津島が、是清のいる部屋の襖をあけた。

そこは二間の床の間のついた大広間で、津島がひよいとみると、その床の間に、みごとなだるまの大幅がかかっている。

（ははあ。宿の亭主、妙に気をきかせたな）

と思い、数歩すすんで、あつと言った。

「なんとそれは、湯上がりのだてら姿で脇息に寄りあぐらをかき、ゆったりポーズをとっている高橋さんその人だったのである。」

津島が初めて是清の知遇を得たのは大正二年だから、このときは是清を知つてすでに数年がたつていたはずである。にもかかわらず、だるまの幅と錯覚したというのは、よほど似ていたからに相違ない。

もつとも、こどものころから是清の顔は、満月のように丸かった。この満月のような顔が、かれの楽天的な性格に、より輪に輪をかけるきつかけとなつたといつていい。

是清は、のちにのべるような事情で、生後まもなく幕臣の家から仙台藩の足輕高橋是忠のもとへもらい子に出されたのだが、そのかれがちょうど三つくらいときだったという。

仙台藩の江戸中屋敷の東北隅に、お稻荷さまがまつてある。この藩の上屋敷は芝新銭座（東新橋一丁目付近）にあり、中屋敷は愛宕ノ下大名小路（新橋六丁目付近）で、目と鼻の先であつたから、上屋敷のお長屋のこども連中は、よくそこへ遊びにでかけた。

その日もみなで遊んでいると、藩主の奥方のお参りがあるというので、先供が人払いにきた。ど

ういうものかこのとき、是清ひとり社殿のうしろでモタモタしていたらしい。

この奥方というのは、陸奥守伊達慶邦夫人である。慶邦は戊辰の役のさい官軍に抗したため、明治元年に城地没収となり、芝の増上寺へ蟄居させられたひとだ。

やがて、奥方がお供をつれて現われる。奥方はふだん上屋敷にいる。なにしろ仙台六十二万石の太宰夫人だから、いくら目と鼻の先のお稲荷さまといえども、お長屋のこども連中のように、ブラリと出かけるわけにはゆかない。略供ながら、行列を組んでゆく。

なかなかたいそうだが、その奥方がしきりにお稲荷さまに手を合わせていると、社殿のうしろから、まんまるい顔をした小さな子がチヨロチヨロと出てきた。と思うと、夫人のきものの裾前を手にとって、

「いいべ、だね、おばさん」

しぜん、裾がまくれた形となり、あでやかなじゅばんの色がはらりとこぼれる。これには、当の奥方より、供の者がうろたえた。

お付きのものが、あわてて是清を引きはなそうとすると、

「よい——」

と奥方が、口もとをほころばせて、

「まるいかわいい顔をして。どこの子だね」

「高橋というものの子でございます」

女中の一人が答えているうちに、この物おじしない三歳の子は、拝殿の畳にすわった奥方のひざ、

へ、ノコノコとはいあがつた。

まわりの者は、はッとしたが、しかし奥方には、これがかえつて、いい気散じになつたらしい。是清の父など、この出来事を耳にし、今にもおとがめがあるかとビクビクしていたが、

——あの子を、あす連れてきますように。

ということになり、翌日、是清はいろんな「下されもの」をかかえて、帰つてきた。

この話がぱつと屋敷じゅうに広がつた。むりもない。足軽の子が奥方によばれ、頭をなでられるなどといったことは前代未聞で、

——高橋の子はしあわせ者よ。

と、たちまち評判がたつた。

この出来事と、この翌年か翌々年におこつたもう一つの事件が、かれの人格形成に大きく影響したと、のちに是清自身が語っている。

もう一つの事件、というのは、紀州か尾張だつたかの殿様の行列が通るといふので、是清が表へ見物にでたときにおきた。いよいよ供揃どもぞろいがくるという直前、むかい側にいた近くの主婦が、是清に手まねきをした。

それが、まずかつた。前後の見さかひもなく飛び出した是清が、道の真ん中で転げ、おりから疾風のごとくかけてきた先駆の騎馬士のヒヅメに、かけられてしまったのだ。交通事故は、江戸時代にもあつたとみえる。

みなが驚き、是清をだきおこすと、なんとこれがカスリ傷ひとつない。ただわずかに、馬のわら

じの跡が、着物についていただけだったという。ちなみに、当時まだ蹄鉄は、米国公使ハリスが自分の乗馬につけていたくらいなもので、一般には普及していなかった。

このときも、藩の連中が、

——高橋の子は運のいい子だ。

と、たちまち評判した。

仙台藩馬術指南役の岩淵英記などは、

「さすが、御三家の馬乗りじゃ。あんなとき騎士が少しでも狼狽し手綱を引いていたら、必ず踏み殺されておつたろう。御三家の騎士の馬の下になった高橋の子は幸運児じゃ」

と、妙なほめかたをしたほどである。

この二つの事件から、是清は子供ながら、

（自分は生まれつき運がいいのだ）

と思い、やがてそれが信念となり、

——以後どんなに失敗し、窮地におちても、自分にはいつかよい運がくると一心に努力した。それが、私を楽天家にしたと思う。

と、晩年、みずから語っている。

そのためであろう、津島寿一は是清が不平や不満、ぐちをこぼしたりするのを一度も聞いたことがないという。昭和十年四月、是清は珍しく大蔵省新入生に訓辞をしたが、そのときに語った、

「きみたちのこれからの人生は長いが、決して不平不満をおこしてはならん。不平不満は常に心を

くもらす。みずからの努力で明るく天地をひらきたまえ」

という言葉が、きわめて印象深かったと、津島は語っている。

それはともかく、すんなりと「自分は幸運児」と思いこめたこと自体、是清には生来、楽天家たるべき素質があったということであろう。

二

しかし、是清の出生は、世間的な見かたをすれば、けつして幸運なものではなかった。

さきに、是清の実父を、幕臣、と書いたが、幕臣は幕臣でも武士ではなく、御絵師である。

川村庄右衛門守房もりぶどうといい、同じ御絵師でも、御同朋頭支配ごどうぽんがうし、という役づきだったから、かなりえらかったのであろう。号を探昇たんしょうといい、江戸本丸のお屏風びやうぶを専門に描いていた。

母は、守房の妻ではない。きんきんといい、川村へ奉公にきていた芝白金の魚屋の娘である。是清を身ごもったとき、きんは十五歳であった。

守房は、おそろしく律義なひとだったが、煩惱ぼんのうには、もろかったらしい。たいへん酒好きで、酒屋からは三日にあげず、正宗の三ツ割り樽をとっていたという。婦人にかけても世間なみ以上で、酒と婦人というこの二つの性癖は、後年、是清にもつたわった。

——ふとした間違いで。

と一書には、是清が生まれる契機となつた父母の情事を、淡泊にかいてある。が、その間には、さまざまな情景があつたことであろう。

ともかく是清は、安政元年閏七月二十七日、芝中門前町の、きんの叔母の家で生まれた。

その数日後には、はやくも高橋家へ里子に出されている。そしてそれが、この二年後に、正式に高橋の養子になるきっかけとなる。是清が生まれたとき、四十七歳であつた守房にはすでに四男二女があり、もう子どもはたくさん、ということであつたのだろう。

高橋の当主は、覺治是忠かくぢしちゆうといい、その妻、つまり是清の養母は、文ふみという。

ほかに、養祖母がいた。喜代子、というひとである。はらのすわつた婦人で、このひとが、惜しめない愛を是清にそそいだ。

かれが、この祖母から出生の秘密をあかされたのは、五つか六つのときであつたという。

実父守房の家は、おなじ芝の露月町うげつちやうにあり、なんでも数寄すきをこらしたりっぱな屋敷であつたといわれる。当時、少年の是清は、祖母に手をひかれてしばしばこの露月町うげつちやうの家に出入りしたが、しかし守房は、少しも父らしいそぶりを見せなかつたという。

が、これは別に、守房が薄情だつたからではない。いったん養子にやつたことにたいする、江戸人の義理である。

幕府瓦解後のことだから、のちの話になるが、米国から帰つて大学南校（東大の前身）の教官をしていた是清は、ひんぱんに川村家と往来した。守房もときにはぶらりと是清を訪ね、ともに酒をのむのを楽しみにした。が、そのようなときでも、守房は父であらうとはせず、

——高橋さん。

と、自分の子をさんづけにして呼んだ。

そのころのことであろう。ひっそくした川村が、すでに露月町の屋敷も人手にわたし、深川の閨^{かん}魔堂橋ぎわで団子屋^{だんこや}を始めることになった。が、資金がない。守房の家内が思いあまって是清に、「こんなことを頼めた義理じゃないが、ご時世でね、家も困っちゃまって急にお金が入り用になったんだけど、二十五金^ご両^{りょう}ばかり手伝っておくれでないか」

そう、頼んだことがある。

「今でもおぼえているが、私は義母からこの言葉を聞いたときくらい、嬉しかったことはない。むろん、すぐに才覚^{さいかく}して、有難く持っていた。」

と、後年、是清が語っている。これもまた、江戸の人情、というべきであろうが、それにしても、この純な是清の心情はどうであろう。

是清は、生みの母のきんにはただの一度しか会っていない。かの女は、

——丈高^{さかたか}からず、小肥り^{こひり}で。

と、一書にある。が、目鼻だちの整ったなかなかの美人だったらしい。まる顔だったというから、この点は、是清は、母の血をうけたのであろう。

是清には、母をおなじくする妹が、ひとりいた。きんが、のちに芝浜松町の塩魚屋へ嫁入りして生んだ子である。名をかねというが、そのかねが是清といっしょにうつした写真が一枚、のこっている。

それで見ると、かねは細おもての、当時の言葉でいえばやなぎ腰^{やなぎこし}というのか、いかにもきやしやな婦人だが、しかし、これまたキリリとした顔だちの、なかなかの美人である。きんはまる顔で、

かねは面ながという違いはあるが、しかし、きんのおもかげをしのぶには、このかねの写真を通じてするしかない。

安政二年というから、是清が三つのおときだ。義父母にだかれて、赤坂の氷川さまにおまいりをした。

その氷川神社の境内で、

「おや」

と、養母の文が声をあげ、夫のそでをひいた。

「あのひと、おきんさんじゃありませんか」

文は、知りあいだったから、声をかけると、

「おや、まあ」

ときんは言ったが、目はすぐ、生みおとしてほどもなく生き別れたわが子のほうに走った。文が、「おひさしぶりですが、お達者ですか」

と言うが、きんは口々に耳にもはいらないらしく、じつと是清を見ている。そのおきんの姿には、わが子をいとおしむ情があらわに出ていて、高橋夫人も気をきかし、そつと是清を押し出すようにした。

が、「これが、あの子で……」とは言わない。おきんも聞きはしない。けれども、双方のころはちゃんと通じている。のちに文は、

「おきんさんは和喜次(是清の幼名)をじつと見つめて、よほどなつかしく、嬉しかったんだろうね。」

こう、なんというか、うつとりとしちまって、いつこうにそばを離れようとなさらないのさ。その気持ちやすーッとこっちに移って、胸がつまっちまってねえ」

と、はなした。後年、是清はこの挿話を、祖母からまた聞きして、

「これが、私の生母に直面したそもその初めで、また最後であつた。」

と語っているが、しかし三歳では、母の顔をしっかりと見おぼえようにも、手だてがなかったであらう。

きんは、この六年後、かねを生んでわずか十四日後に、折りから江戸の町に流行した麻疹に感染して、なくなつた。年わずか二十四。佳人薄命というべきか。

是清はこの母を慕うあまり、のちにはかねをひきとつて、肉親の情をあふれるほどそそいだ。学問をさせ、もと下総佐倉の藩士で、工部大学化学教授の小出秀正にとつがせたが、しかしこの妹も薄命で、明治二十三年六月、肺炎にかかり、

「もういちど達者なからだになりたいけど、兄さん、どうにかならないかしら」

と言いながら、あとに子を残して他界した。

以上のように是清は、家庭的には不幸であつたが、しかしそれでいて、あおい大空のように明るく成長をしたのは、やはり生来の楽天的な性格にもよつたことと思われる。